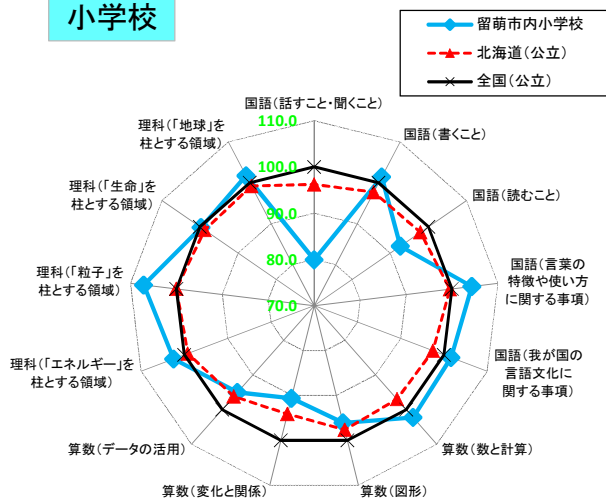


■留萌市内の状況及び学力向上策（小学校数:5校、児童数:120人）（中学校数:2校、生徒数:130人）

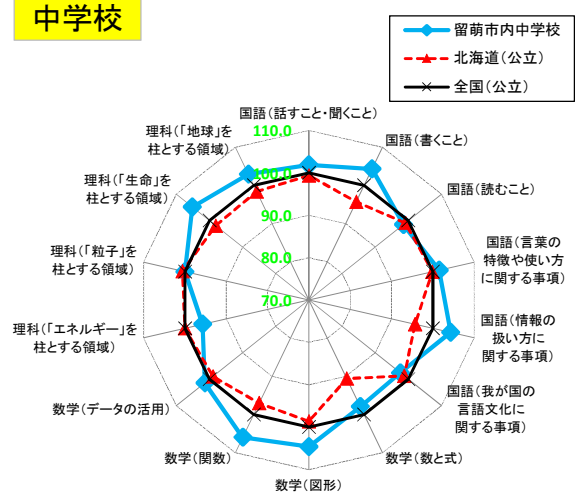
【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものの（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）

小学校

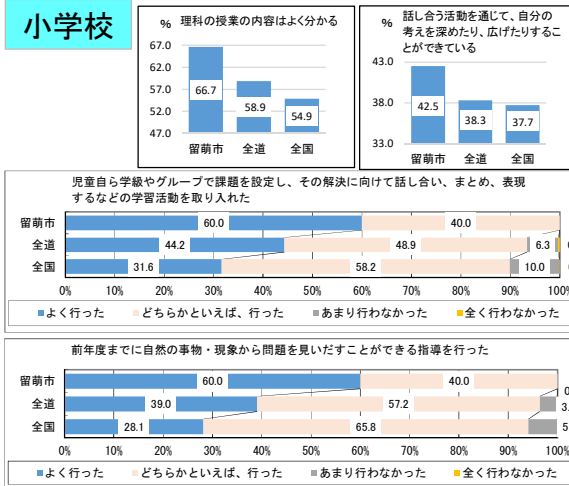


中学校

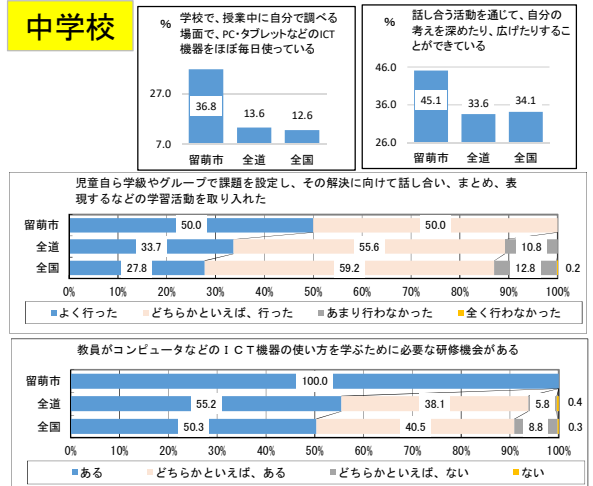


【質問紙の状況】

小学校



中学校



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

授業において、課題解決に向けて表現するなどの活動を取り入れ、児童が話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりするなど、理解が深まったことにより、国語の1領域2事項、算数の1領域、理科の3領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

理科の授業において、自然の事物・現象から問題を見いだすことができる指導を行ったことにより、理科の授業の内容がよく分かる」と回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

授業において、課題解決に向けて表現するなどの活動を取り入れ、生徒が話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりするなど、理解が深まったことにより、国語の2領域2事項、数学の3領域、理科の2領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

市内の学校に対して、教員を対象としたコンピュータなどのICT機器の使い方を学ぶために必要な研修機会を設定し、授業改善を推進したことにより、授業中に自分で調べる場面でPC・タブレットなどのICT機器をほぼ毎日活用したと回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

【留萌市の学力向上策】

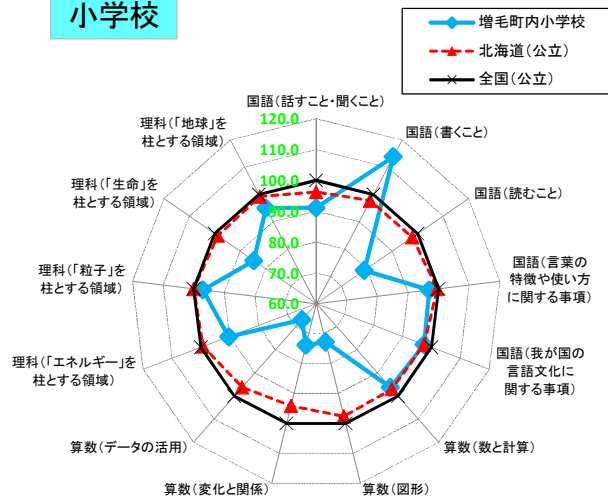
- ◎ 各種学力調査の結果分析に基づく検証改善サイクルの確立
- ◎ 交流授業等による9年間を見通した小・中学校が連携した学習、生活習慣の確立に向けた取組の推進
- ◎ 民営塾との連携によるICTを活用した学習支援ツールを用いた教育活動の推進

■増毛町内の状況及び学力向上策（小学校数:1校、児童数:29人）（中学校数:1校、生徒数:16人）

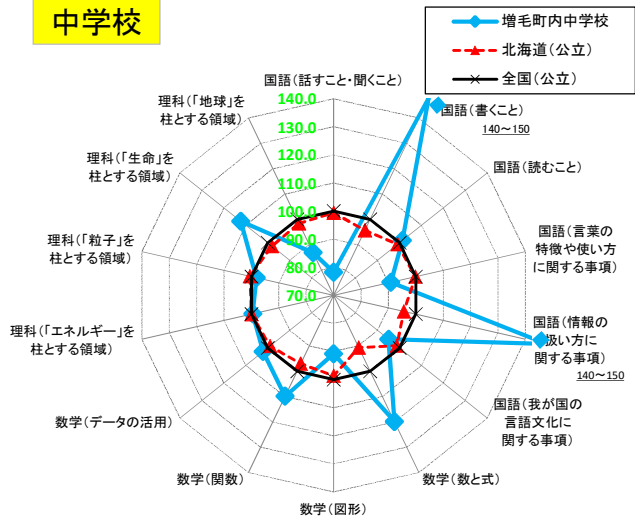
【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものを（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）

小学校

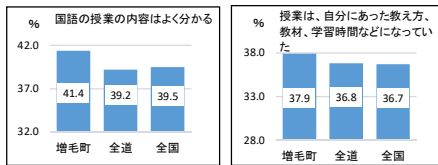


中学校

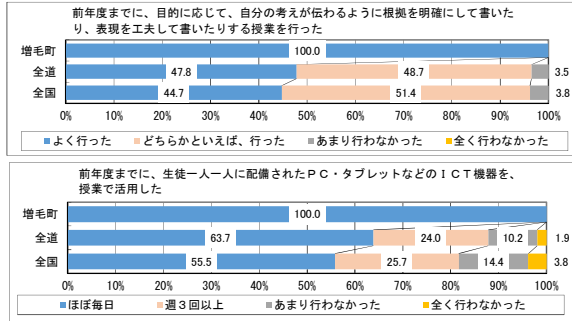
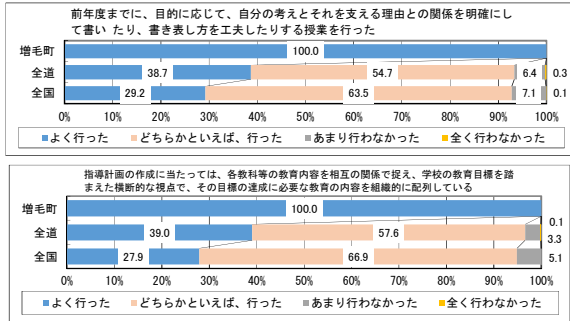
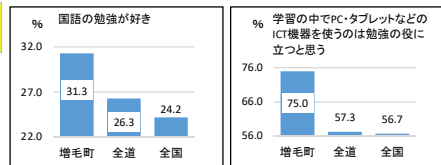


【質問紙の状況】

小学校



中学校



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

国語の授業において、目的に応じて、自分の考えとそれを支える理由との関係を明確にして書いたり、書き表し方を工夫したりする授業を行ったことにより、授業の内容についての理解が深まり、「書くこと」の領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列したことにより、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

国語の授業において、目的に応じて自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり、表現を工夫して書いたりする授業を行ったことにより、国語の勉強が好きと回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

授業において、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をほぼ毎日活用したことにより、学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思うと回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

【増毛町の学力向上策】

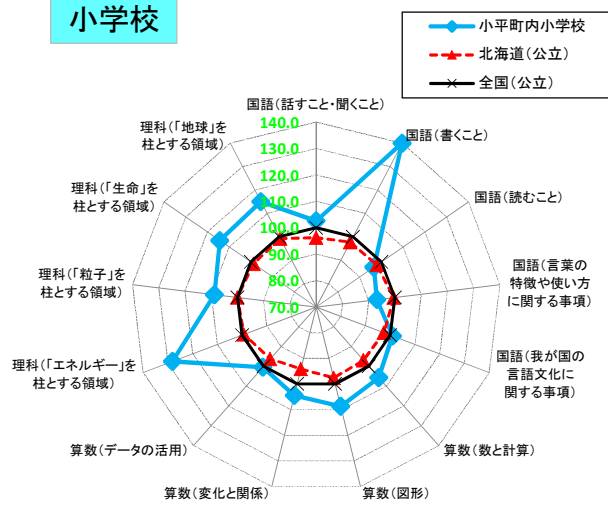
- ◎ 各種学力調査の結果分析に基づく検証改善サイクルの確立
- ◎ 交流授業等による9年間を見通した小・中学校が連携した学習、生活習慣の確立に向けた取組の推進
- ◎ オンライン授業等、ICTを活用した教育活動の充実に向けた教職員の研修の推進

■小平町内の状況及び学力向上策（小学校数:2校、児童数:14人）（中学校数:1校、生徒数:15人）

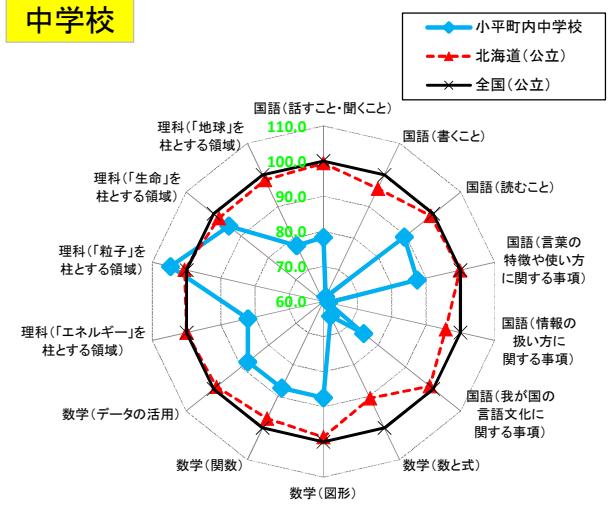
【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したもの
 （市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）

小学校

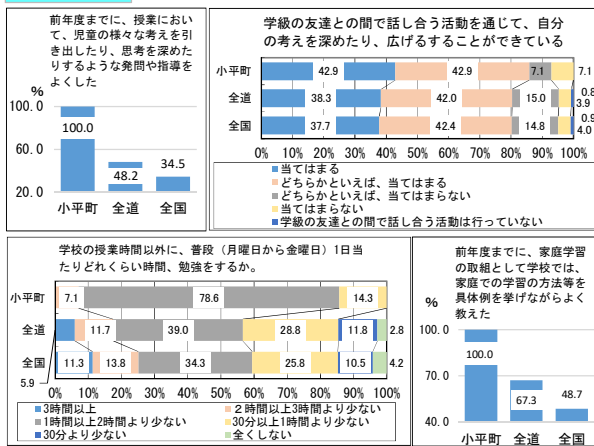


中学校

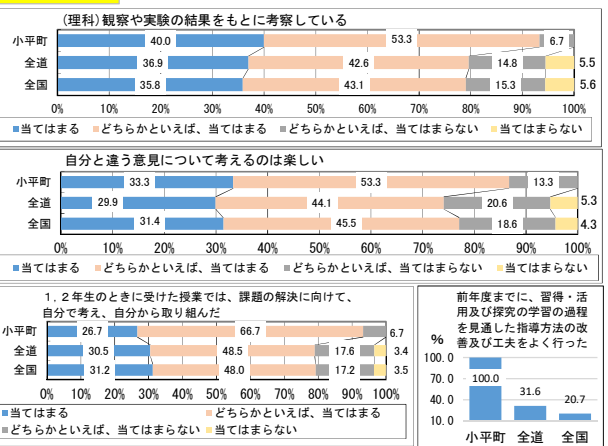


【質問紙の状況】

小学校



中学校



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

授業において、児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を行ったことにより、児童は学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができ、国語の2領域1事項、算数の4領域、理科の4領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

家庭学習の取組として、児童に対して家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えたことにより、授業時間以外に普段から家庭学習を1時間以上取り組むと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

理科の授業において、生徒が、観察や実験の結果をもとに自分とは違う意見について楽しく考えながら考察するなどの学習に取り組んだことにより、理科の1領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

学校は、習得・活用及び探究の学習の過程を見通した指導方法の改善及び工夫に取り組んだことにより、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むと回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

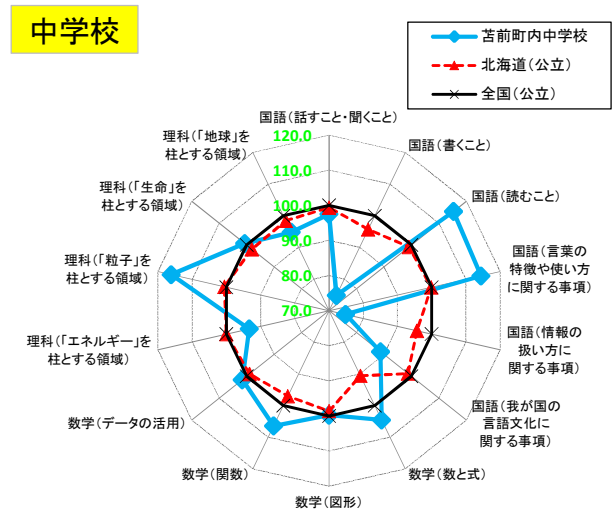
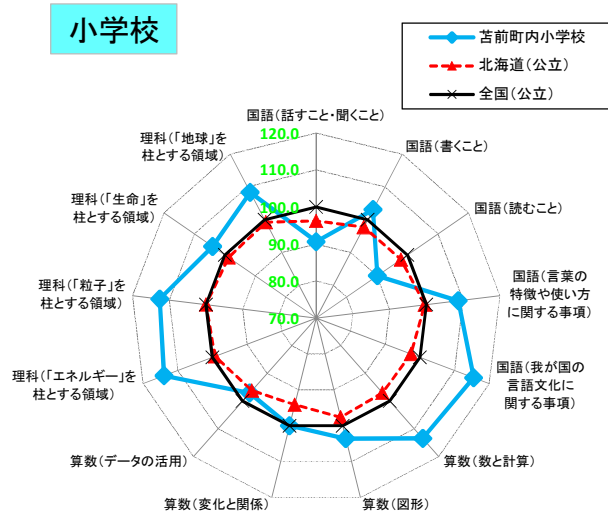
【小平町の学力向上策】

- ◎ 各種学力調査の結果分析に基づく検証改善サイクルの確立と組織的な学習指導の改善
- ◎ 1人1台端末を活用した、児童・生徒の習熟度に応じた指導による資質・能力の確実な育成
- ◎ 子どもの12年間を見通した系統的・継続的な指導を図るための幼小中連携の推進

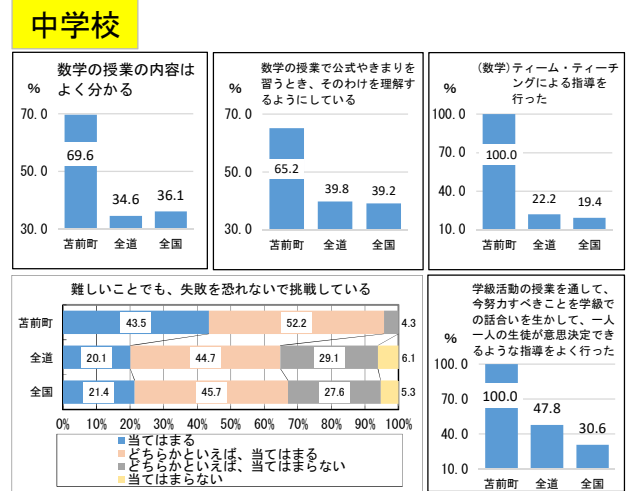
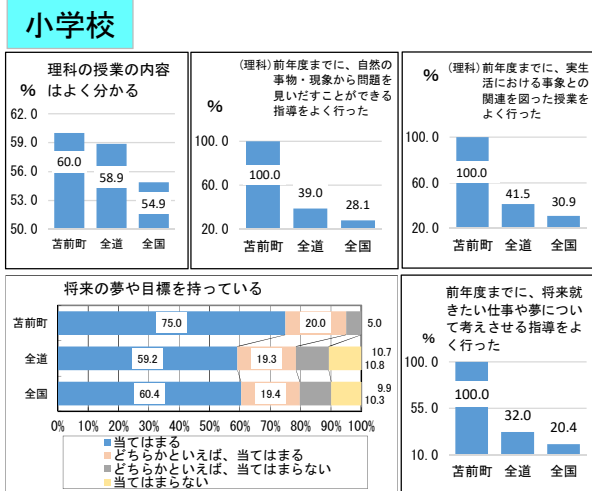
■ 苫前町内の状況及び学力向上策 (小学校数:2校、児童数:20人) (中学校数:2校、生徒数:23人)

【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものの(市町村の平均正答率÷全国(公立)の平均正答率×100で算出)



【質問紙の状況】



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

理科の授業において、自然の事物・現象から問題を見いだしたり、実生活における事象との関連を図ったりする授業を行なったことにより、理科の授業についてよくわかると回答した児童の割合が全国を上回るとともに、理科の4領域で全国平均正答率を上回ったと考えられる。

学校は、児童に対して、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導を様々な教育活動において行ってきたことにより、将来の夢や目標を持っていると肯定的に回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

数学の授業において、チーム・ティーチングによる個に応じたきめ細かな学習指導を行ったことにより、数学の授業の内容はよく分かると回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

数学の授業において、公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するように学習したことにより、3領域で全国平均正答率を上回ったと考えられる。

学校は、学級活動の授業を通して、今努力すべきことを学級での話し合いを生かして、一人一人の生徒が意思決定できるような指導をよく行ったことにより、難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦したと肯定的に回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

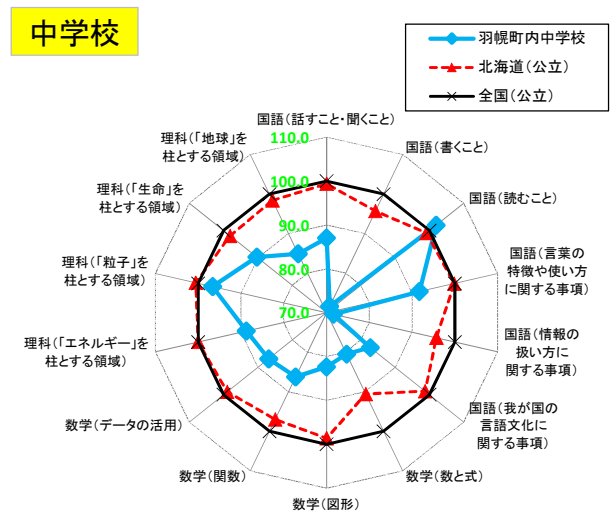
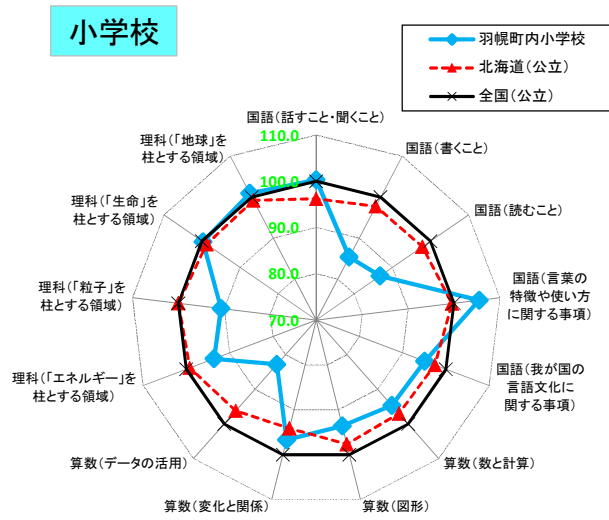
【苫前町の学力向上策】

- ◎ 全国学力・学習状況調査の結果分析を基にした学力向上策の改善・充実
- ◎ 教育支援員等の配置や、チーム・ティーチングの積極的な活用による個に応じたきめ細かな学習指導体制の充実
- ◎ 自立心や、協調性・社会性などを養い、豊かな人間形成へと結びつく学習機会の充実

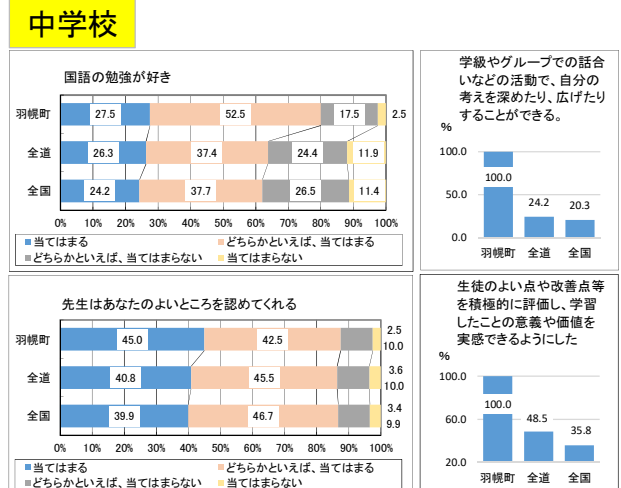
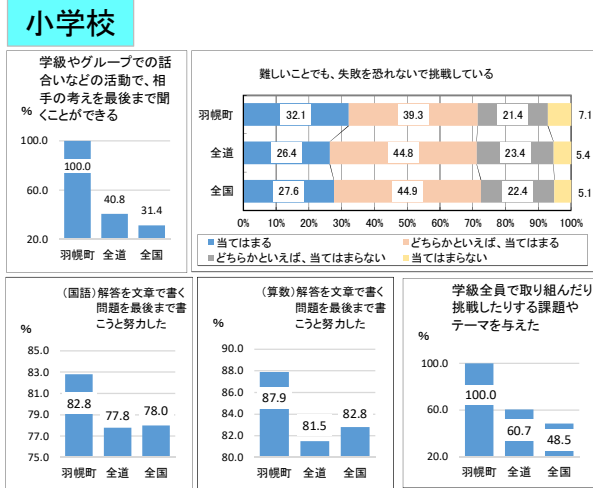
■羽幌町内の状況及び学力向上策（小学校数:3校、児童数:58人）（中学校数:3校、生徒数:39人）

【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものを（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）



【質問紙の状況】



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

国語で学んだ事柄を生かしながら、学級やグループでの話し合いなどの活動を行い、相手の考えを最後まで聞くことができるように指導したことにより、国語の「話すこと・聞くこと」の領域及び「言葉の特徴や使い方に関する事項」で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与え指導してきたことにより、難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していると回答した児童の割合が全国を上回るとともに、国語及び算数の解答を文章で書く問題を最後まで書くよう努力したと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりする指導を各教科で行ってきたことにより、国語の授業改善が図られ、国語を好きと回答した生徒の割合が全国を上回るとともに「読むこと」の領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

生徒のよい点や改善点等を積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにしたことにより、学習の振り返りの充実につながるとともに、先生はあなたのよいところを認めると回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

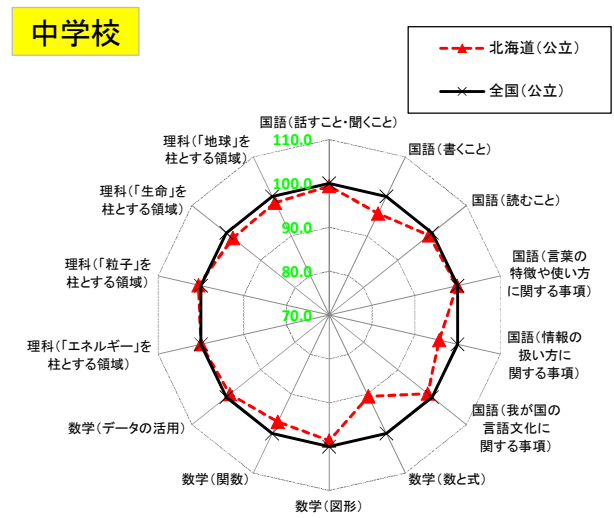
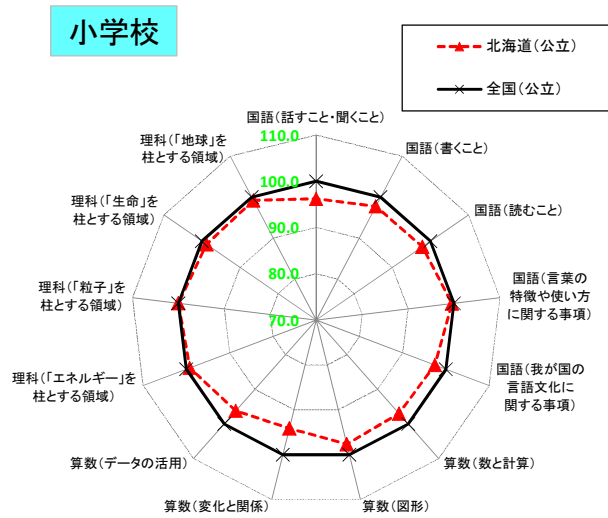
【羽幌町の学力向上策】

- ◎ 授業改善推進チーム員を活用するなどした小・中連携による全国学力・学習状況調査結果に基づいた検証改善サイクルの確立
- ◎ ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた授業改善
- ◎ 学校・地域・保護者が連携した児童生徒の規則正しい生活習慣の確立及び家庭学習の充実

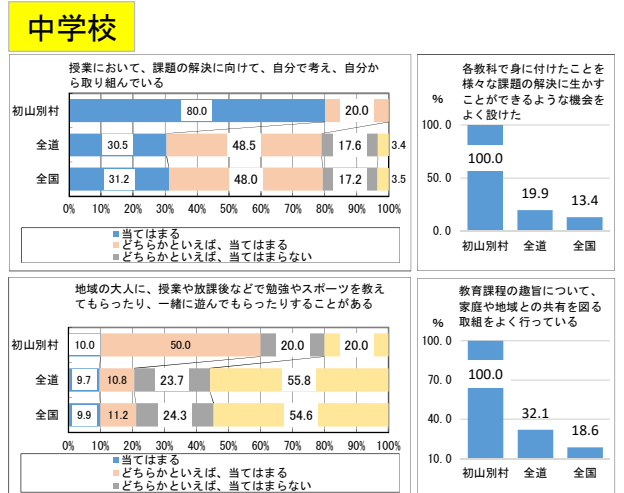
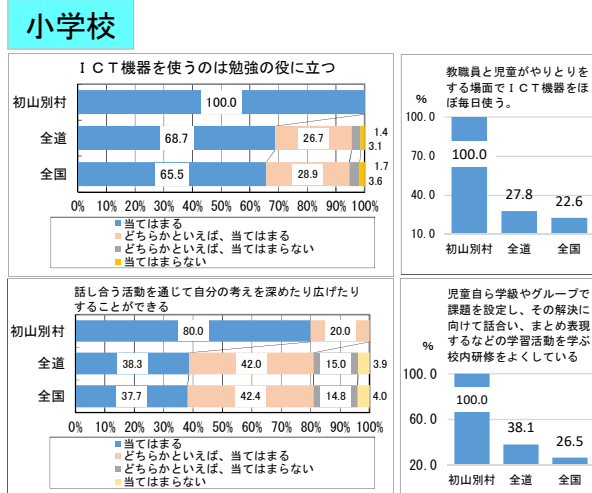
■初山別村内の状況及び学力向上策（小学校数:1校、児童数:5人）（中学校数:1校、生徒数:10人）

【教科全体の状況】 ※児童生徒数が少なく、個人が特定される恐れがあるため、初山別村の教科のデータは掲載していない。

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものの（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）



【質問紙の状況】



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

授業において、児童が教員とやり取りする場面において、1人1台端末を使用した学習をほぼ毎日行ったことにより、ICT機器を使うことは、勉強の役に立つと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

学校は、児童自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ校内研修を行ったことにより、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができたと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

学校は、各教科で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を多く設けたことにより、授業において、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むと肯定的に回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

学校は、教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組を積極的に行うことにより、地域と大人と、授業や放課後など勉強を教えてもらったり、一緒に遊んでもらったりすると回答した生徒の割合が全国を上回るなど、学校の教育水準の向上に寄与していると考えられる。

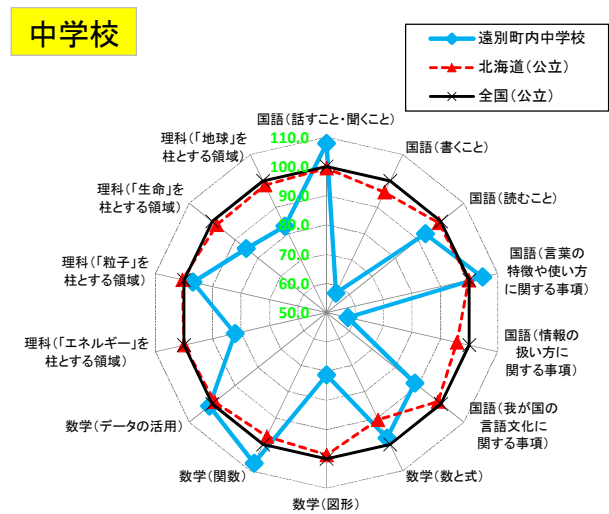
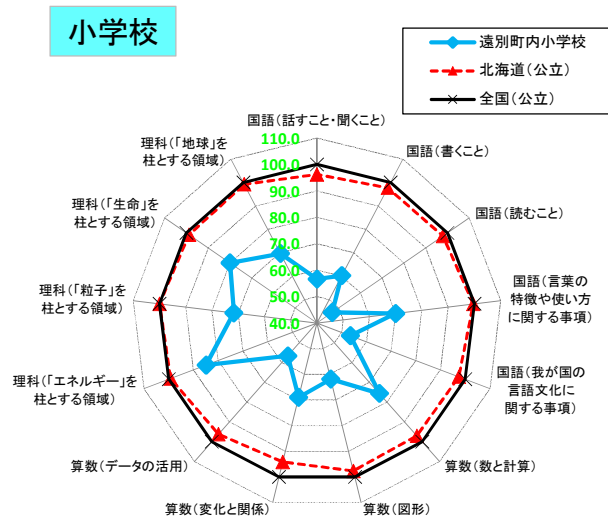
【初山別村の学力向上策】

- ◎ 初山別村学力向上連携協議会による各種学力調査の分析に基づく検証改善サイクルの確立
- ◎ 授業改善推進チーム員を活用した指導力の向上及び1人1台端末を活用した学習指導の充実
- ◎ 学校・地域・家庭・行政の連携による児童生徒の9年間の学びの連続性を意識した教育活動の推進

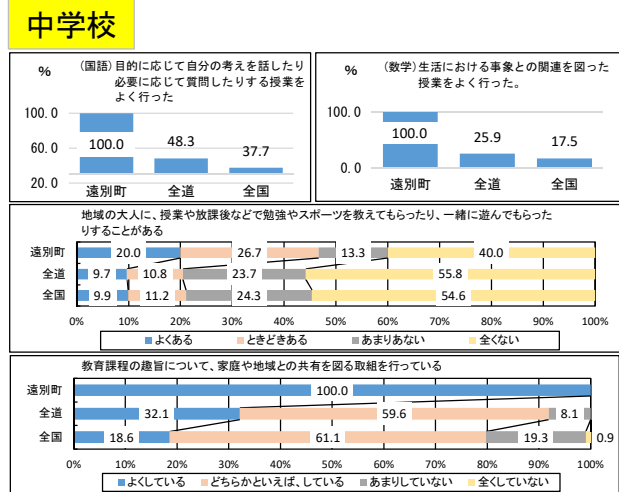
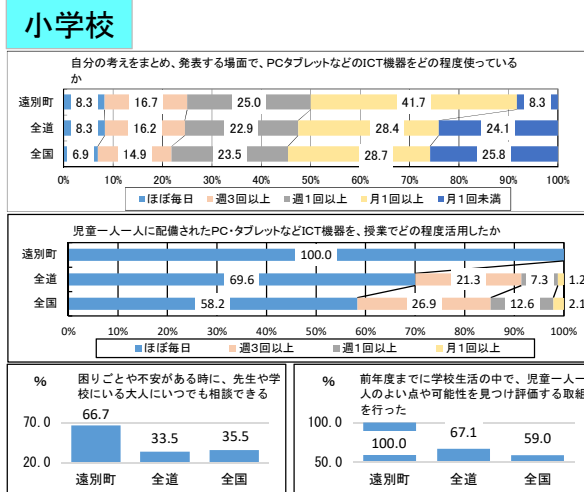
■遠別町内の状況及び学力向上策（小学校数:1校、児童数:12人）（中学校数:1校、生徒数:15人）

【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものを（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）



【質問紙の状況】



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

学校は、教員がICT機器の使い方を学ぶために、必要な研修を行い、児童一人一人に配備されたICT機器を、授業で毎日活用したことにより、児童は、自分の考えをまとめ、発表する場面で、PC・タブレットなどのICT機器をほぼ毎日活用したと回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

教員は、学校生活の中で、児童一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する取組を行ったことにより、困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人についても相談できると回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

国語の授業において、目的に応じて、考えを話したり必要に応じて質問したりする授業をよく行ったことにより、国語の1領域1事項で、全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

数学の授業において、生活における事象との関連を図った授業をよく行ったことにより、数学の2領域で、全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

学校は、教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組をよく行ったことにより、地域の大人に授業や放課後などで勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがよくあると回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

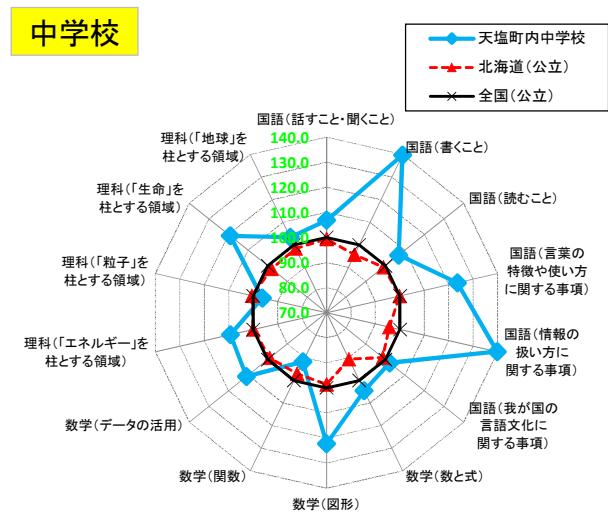
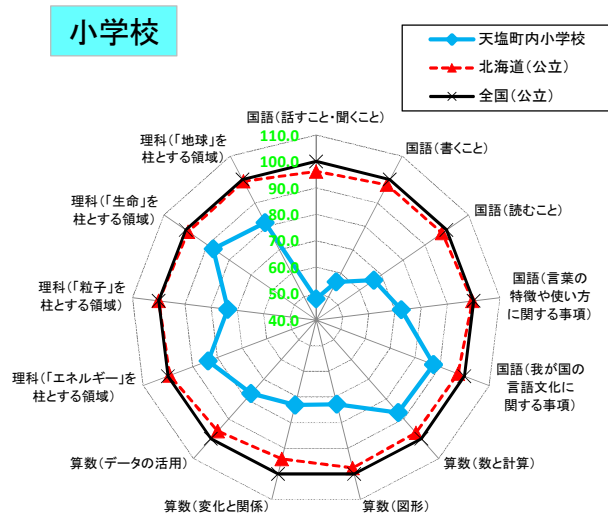
【遠別町の学力向上策】

- ◎ 学習指導の改善・充実に向けた教職員が一丸となった取組の支援及び児童生徒が楽しく学べる環境づくり
- ◎ ICT機器の活用に関して十分な知識を持った専門スタッフを学校に配置するなど技術的なサポート体制に係る取組
- ◎ 地域の教育資源を有効に活用した学習支援の強化・継続

■天塩町内の状況及び学力向上策（小学校数:2校、児童数:22人）（中学校数:1校、生徒数:20人）

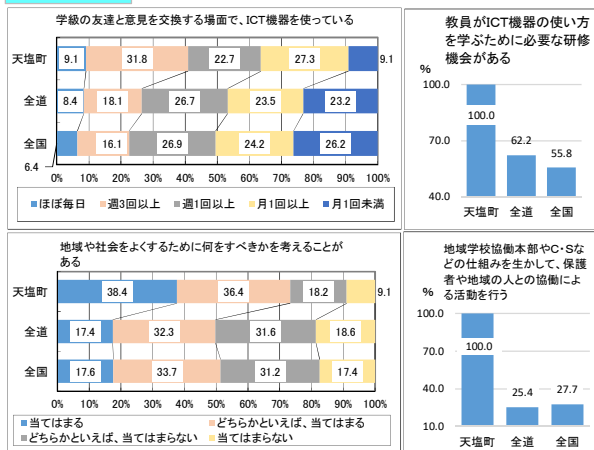
【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び市町村の状況をレーダーチャートで示したものの（市町村の平均正答率÷全国（公立）の平均正答率×100で算出）

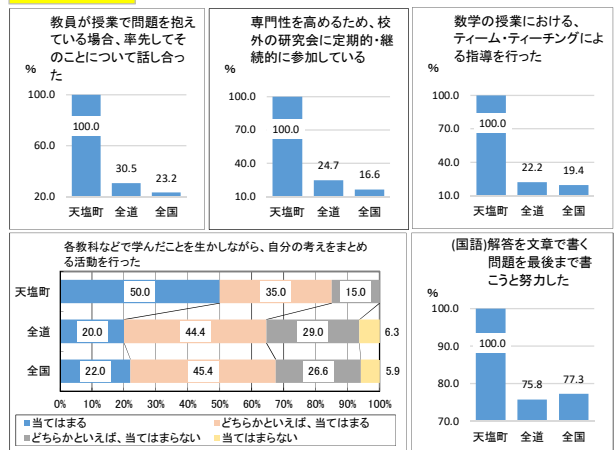


【質問紙の状況】

小学校



中学校



【上記結果の考えられる要因の分析】

小学校

町内の学校に対して、教員がICT機器の使い方を学ぶために必要な研修を行い授業改善を推進したことにより、児童が授業等でICTを活用する機会が増え、学級の友達と意見を交換する場面で、ICT機器をほぼ毎日使用していると回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

学校は、地域学校協働本部やC・Sなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人の協働による活動を行ったことにより、児童が地域との関わりや地域について考える機会が増え、地域や社会をよくするために何をすべきか考えるという回答した児童の割合が全国を上回ったと考えられる。

中学校

学校は、教員が授業で問題を抱えている場合、率先して話し合う機会を設定したり、各教員が積極的に校外の研究会に参加したりするなど授業改善を図るとともに、数学の授業においてはチーム・ティーチングによる個に応じたきめ細かな学習指導を行ったことにより、国語の3領域3事項、数学の3領域、理科の3領域で全国の平均正答率を上回ったと考えられる。

各教科において、学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行ったことにより、根拠を明確にして自分の考えを書くなどの力が身に付き、今年度の国語の問題において、解答を文章で書く問題を最後まで書くよう努力したと回答した生徒の割合が全国を上回ったと考えられる。

【天塩町の学力向上策】

- ◎ 「天塩町学力・学習状況調査研究所」による調査結果の分析に基づく検証改善サイクルの確立
- ◎ デジタル教科書の活用をはじめとしたICT機器を用いた授業改善
- ◎ 「学習サポート事業」における公設民営塾の取組等、学校・地域・保護者が連携した学習環境の充実